
マハラジャな人々

品川かのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マハラジヤな人々

【Nコード】

N6010Y

【作者名】

品川かのこ

【あらすじ】

学校の課題で砂丘を見に行った帰り、なぜか本物の砂漠に紛れ込んでしまった主人公。そこで出会った人々はなんだかマハラジヤな方々で……。異世界召還系ラブコメディ（になるはず）です。

1・はじめりは砂漠から

太陽が、視力を奪ってやるとばかりにさんさんと輝いている。あ、空は青空、世界は平和。

強い日差しを受けて私の影が白い砂にくつきりと落ちている。

私が高校に入学したのは昨年春のことだ。今は11月。

時の経つのは早いもので、始めは履き慣れなかった革靴も半年が経った今では体の一部のように馴染んでいる。

今は両足とも砂に埋もれて足首しか見えないけど。

ええそう、お気に入りのプリーツスカートも砂埃に霞んで白いけど。

気が付けば私は何故か砂漠のど真ん中に突っ立っていた。

「やってられっか!!」

私は世界を祝福するのをやめてキレた。そりやそうだ。授業の課題を済ますため学校帰りにちよこつと砂丘を見に來ただけのはずが、なぜか本物の砂漠に投げ出されてしまったのだから。

原因も現在地もさっぱりわからない。確か地域学習うんたらで、身近な観光地を調べる係になって、砂丘を見に來て、ちよつと砂の上を歩いてたらだんだん暑くなって、氣付いたらこの状況、と。ともかく現状を打開するべく元來た道を辿ってみたりもしたが、行けども行けども終わらない砂漠だった。十分ほど歩いてようやく氣付いた。こりゃ本物の砂漠だと。まさかあのしょぼい砂丘が本物の砂漠と繋がっていたとは知らなかった。

しかし、11月なのにこの日照りとはさすが砂漠。日本なのにね。日本ですよねここ？

あまりにも有り得ない状況にファンタジー的な単語が脳裏を過ぎ

ったりもしたが、深く考えないことにしておく。

それにしても暑い。冬服の厚手のブレザーにこの陽射しは耐え難い。ていうか日焼けしそう。などなど考えながらふと下を見ると足元にできた影の中、ちよつと早めに起き出した虫が涼んでいた。おうおう、かわいいのう、今見渡す限り存在する生物は私とお前だけだよ。私はそつとその虫をつまみあげる。やたらツルツルしていて金色だ。私はソレを投げた。

「人の影で涼むなコノヤロー！」

ああ、暑さとはなんと恐ろしい。やり場のない苛立ちをもたらし、私のような慈悲深い人間からさえも哀れみの心を奪ってしまうのね。虫は「プイ」と悲しそうな羽音を立てて、飛んでいった。

ちよつと清々してニヤツと笑ってしまう私。いや、私、優しい女子高生だよ、うん。この暑さが悪いのさ。

そうこうするうちなんだか喉が渴いてきた。あいにくと飲み物は持っていない。でも、あっちこっち歩き回っても、余計に迷うだけで終わりそうな気がする。

かといって、この砂漠の真ん中で、ボサツと突っ立ってるのも気が滅入るが。

ウーム…。

「座つとこ」

ウロウロしても仕方ない。そのうち誰か通りかかるだろう。最悪、誰も来なくても、家族には砂丘に行くって言つてあるし、そのうち探してくれるはずだ。この砂漠が本当に砂丘とつながっているのならば……あ、いやこの考えはやっぱナシで。いやな答えに辿り着きそうだ。

とにかく落ち着いて救助を待てる場所を作ることにした。まず、砂を少し掘って体を横たえる空間に仕上げる。次に鞆から体操着を引っ張り出して、定規と筆箱、弁当箱を支えにして、二重の幕を張った。こうすると砂漠でも涼しくいられるって、前になんかのテレ

ビで言ってたんだ。体操着にデカデカと名前のゼッケンついてるから、恥ずかしいけど。

ミニ天幕の下に体を滑り込ませる。うーん、そんなに涼しくはないけど、何もないよりマシだな。ちょっとは楽みたい。天幕の中では横たわる以外できることもなかったの、ちょっと眠ることにした。目を閉じて呼吸を整えていく…。

と、その時。半分砂に埋まりそうな私の耳が、かすかな話し声を捉えた。

誰か来てくれたんだ！

思わず起き上がりかけた瞬間、想像を超えた言葉が鼓膜を震わせた。

「ヌヤー。チョベリピツチョン」

ちよつとまで、今なんつった？

声自体は、凛々しい男の声だけど、なんか内容おかしい。怖いな…起き上がるのはやめて寝たふりを敢行することにしよう。それにしても、なんか外国語っぽいけど…。

声はそれだけでは終わらず、更に続く。

「ニヤシロ、ワンワンヲヨベ。ピリヤサラマキンヌ」

「キツニユマグネ？」

「シマダデブー」

「ニリヤ。ワンワンヲヨベ」

「ニリユ。ワンワンヲヨベ」

…ますます意味が分からない。どう考えても日本語ではないのに、発音が日本語そっくりなのだ。もしかしてすごい方言とかなのだろうか。だとしたら一体この状況でワンワンを呼んでどうするつもりなんだろう、そして島田さんをデブとか言っな。

二人の外人らしき男たちはどうも私に用事があるらしく、交互に声をかけはじめた。

「ワンワン〜サリ」

「ワンワン〜」

近くまで来て天幕に手を差し伸べているようだ。顔は見えないが、天幕の隙間からサンダルのようなものを履いた足とじやらじやらし腕輪をつけた手が見える。優しい声音で呼びかけてくる。

「ワンワン〜」

「……って、ワンワンって私かよ！」

思わずがばつと跳ね起きて簡易天幕を吹っ飛ばし、ツツコミを入れてしまった。

「ワンワン！」

やたら嬉しそうに叫ぶ外人たちともに目が合ってしまう。しゃがみこんでいる二人はこの上なく嬉しそうな表情で私を見つめている。うち一人は茶髪に黄金色の瞳、もう一人は黒髪に青い目。茶髪のほうが十代後半で黒髪は二十代前半といったところか。どちらも女子高生の集団に放り込んだらきゃーきゃー言われそうな整った顔立ちをしているが、なにより私の目が引き付けられたのはその二人の服装だった。

肩の開いた白い布のようなものを基本に、それぞれ硝子玉の首飾りや、やたら細かい細工のベルトなんかをうっとおしくらい重ね

ていて、右肩からは、だらつとしたペルシャ絨毯のようなものを垂らしていた。

何だ、この異文化っぷりは。

とても日本の寂れた観光地で出会う人間の服装とは思えない。

もしや夢なのではと思って頬をつねるが、痛かったので現実のようだ。

「ワンワンゝヌラゝ」

一瞬気を抜いている隙に、意外と近くから声が聞こえた。気付けば外人たちは私を挟み撃ちにするようにして迫ってきている。茶髪の方なんか、息が顔にかかるくらい近い。

「ぎゃー！近つ！なんだあんたら！こつちくんない！」

しかしどうやら日本語は通じないらしく、二人の外人はワンワンワン言いながら更に近寄ってきた。おまえら三歳児か。

茶髪から身を逸らすとその分だけ黒髪に距離を詰められ、逃げ場がない。はっ、もしかいつら、いたいけな私をどこかにさらっていくつもりなんだろうか。外国では日本人の女の子は人気だとか聞いたことあるし！

私は恐怖を感じ、砂をすくって茶髪の外人の顔目掛けて投げた。

「シヤラポア！」

効果抜群。茶髪はなぜか国際的テニスプレイヤーの名前を叫びながら砂の上をのたうちまわった。この言語、規則性とかなさそうだな…。

茶髪ののたうちまわりっぷりは、芸人だってこんなオーバーリアクションしねえよと言うくらいいすさまじい。ちよつと可哀相だけど乙女の危機だから仕方ない。もう一人も同じ目に合わせて逃げようと、砂の中に手をつっ込んだ。

そのとき。

砂に突っ込んだ指が何か硬いものに触れた。なんだろう、と思う間もなく、目の前が真っ白になり。

すぐに元に戻った。

なんだろう今の…。立ちくらみ？

しかし、次に聞こえた言葉に、私は更に驚くことになる。

「痛てー！目エ超痛てエ！」

それは聞き慣れた日本語だったのである。

2・掘り当てたもの

一体何が起きたのかよく分からないが、とりあえず茶髪ペルシャ絨毯は突然日本語を叫びながらのたうちまわっていた。

「痛ええええ！目え痛ええええ！！」

その発音、砕けた若者言葉の使い方までどこからどう聞いても日本語だ。さつきまで謎の言語を喋っていたというのに。

「なんで……？」

「なんでってお前が俺の目に砂かけるからだろーがああああ！！」
茶髪がわめいた。ああいや確かにそうだけでも。

「イシユーさま、大丈夫ですか」

今度は黒髪ペルシャ絨毯が日本語で言い、おろおろと茶髪に駆け寄った。どうやら茶髪はイシユーという名前らしい。イシユーは未だ地面でのたうつており、その姿はさながらヤダヤダをする子どものようであった。

腕や足に大量に飾られた金属の輪がジャランジャラン鳴って非常にうるさい。彼の赤いペルシャ絨毯は砂にまみれて大変もったいないことになっている。

それにしても、イシユーがやられても黒髪が「ちくしょうやりやがったな！」とか言ってこないあたり、どうも悪党の類ではなかったようだ。あれ、ちょっとやりすぎたかな……いやでも、ワンワンとか言いながら女の子に迫ってくる方も悪いと思うの！と自分を正当化しておいてみる。

「ナシ口っ、絶対俺たち担がれただろ！こんな野蛮な女が天秤なはずないって！」

「落ち着いてください、とにかくほら、これで目を洗って」

「……ああ、うん、洗う……」

ナシロ、と呼ばれた男が水筒らしき筒を差し出すと、イシューは大人しくそれを受け取り、少し離れて背を向けた。

しかしさっきからこの茶髪、図体はでかいくせにほんと子どもみたいだな！ 目薬のように目に水を垂らして、いてーなどと言いながら瞼をしばしばさせている。

こいつが子どもとするとさしずめお母さんのほう、ナシロが私に向き直って言った。

「申し訳ありません、驚かせてしまったようで。私も殿下も悪気はなかったのです、どうぞお許してください」

両手を合わせて深々と頭を垂れる。その丁寧さときたら、つむじを通り越して彼のうなじがよく見えるほどである。あまりにも畏まられて、私は逆にびびってしまった。

「えっ、ああ、いや、その。私もちょっとやりすぎちゃったと思います、はい」

「全くだ」

遠くからイシューがぼそつと呟いた。なんだこいつ、元はあんなのせいでしょうが！

ナシロがイシューに咎めるような視線を送る。

「殿下。もう洗い終わったならこっちに来てください」

「へいへい」

水筒の栓を閉め頬に垂れた水を拭くと、ふてくされた様子でイシューが戻ってきた。

両手を頭の後ろで組んで明後日の方向を向いている。実に態度が悪い。態度が悪いが、こうして改めてペルシャ絨毯男が二人並ぶと、なんだか圧倒されるものがあつた。まず、髪の色、瞳の色が日本人では有り得ない。肌の色も黄色人種にしては濃すぎるし、顔立ちも彫りが深い。

これはひょっとすると、いやもう高確率でどうやら、何かこう、ファンタジー的なアレが……。

いや、ここは一縷の望みをかけて一応聞いておこう。

「日本とかアメリカとかヨーロッパ、中国って聞き覚えあります？」

「え？すみません、ちよつとよくわからないです」

「聞いたこともねえよそんなん」

はい確定ー。まさか日本の砂丘から徒歩でいける場所にアメリカもヨーロッパも知らない人間が住んでいるわけがない。というか今まで考えないようにしていたけど、この時期にこの気候、百歩譲っても日本じゃ有り得ない。

頭が痛くなってきた。

ということはつまりここは所謂異世界、とかいうやつ？ そんな

馬鹿な。

だって異世界とか、そんな、ねえ？

あ、きつとこれ夢なんだ、そっかー砂丘で横になってるうちに眠っちゃったんだね。だったらもう一回寝よう。

私は考えることを放棄した。

ミニ天幕があつた場所に横たわり、鮮やかなペルシャ絨毯どもが見えないよう目を閉じる。ああそうさ、これは夢だ、だからもう一度目を覚ませばきつと現実さ！

安らかな眠りのポーズをとった私を奴らが囲む気配がした。

「何してんだよお前……」

「あの、お疲れなのでしょうか、でしたらこんなところで休まれずとも……宿をご用意しますよ？」

「つかおまえ本当に天秤なわけ？ とてもそうは見えねえんだけど」
交互にぼそぼそと話しかけてくる。眠れないからやめろよ！

しかも砂漠の癖に背中になんかゴツゴツしたものの当たってるし、なにこれ石かなんか？

もしかしてさっき立ちくらみがしたときに指に当たったやつだろうか。

本当やめてほしい。イライラすることばかりだ！

だってゴツゴツして痛いってことは、これが現実だってことじゃないか！

「ああああもう！」

私は起き上がると左右の男たちを睨み、私を夢からたたき起こしたにつくきゴツゴツを排除すべく砂を掘った。それはもう勢いよく、奴らが呆気にとられている気配を感じたが、もうなんか何もかもどうでもいい。イシューは私が払い上げた砂がまた目に入ったらしく、「ぎゃあ」と呻いていた。残念な奴だ。

「いってええええ！ お前ほんといい加減に」

「あつたあ！」

イシューを無視してゴツゴツの正体を取り上げる。それは石ではなく、錆びた金属で出来た、ずいぶん凝った意匠の細工物だった。中心の軸から左右対称に腕が伸び、それぞれの端に丸い玉がのっている。それはまるで、

「……やじろべえ？」

「天秤だ！」

右隣から身を乗り出すようにしてイシューが叫んだ。あまりにも大きな声だったのでびっくりしてしまう。反対側ではナシロが目を見開き、息を呑んでいた。

天秤？これが。どう見てもやじろべえにしか見えないけど。

きょとんとする私の両腕をイシューが掴んだ。そのまま、顔をぐいと近づけて話しかけてくる。その目はきらきらと輝いていて、そ

れで。

「やはりお前が天秤か！　ずいぶん探したが甲斐があった。ずっとお前に会いたかったんだ！」

整った顔立ちに満面の笑みを浮かべて言った。

えーと。

ええーっと。

さっきまでと随分態度が違うような気がするのは気のせいでしょうか。

目によく砂が入る残念なイケメンが、その目を輝かせながらよく分からないことを言うてくるのですが。

しかも目が砂のせいで充血しててちょっと怖いのですが。

会いたかったって何？　誰に？

すっかりフリーズした私に、ナシロが横から助け舟を出した。

「おおおお落ち着いてください、殿下。まっ、まあ、こ興奮するおおお気持ちちはわかりますぎゃっ」

頼むからちゃんと助け舟になってほしい。

「とつととにかく、まずは私たちの身分を明かしまして、でないと何もお話ができませんから」

「ああ、それもそうだな」

イシューはようやく私の腕を開放すると、肩から垂らした絨毯を翻し、砂の上に肩膝を付いて頭を垂れた。

「俺はイシュベール・ルディ・フェ・ナディール。ここより南方の王国ナディールの王子だ。イシューと呼んでくれ。こちらは俺の従者ナシロ・レティ。俺たちは我が国に“天秤”を迎えるべくここへ来た」

3・お前は俺の

五秒ほどの沈黙の後、私は眉間を指で押さえた。

「……あー、えーと、ごめんちょっと意味わからない」

王子？ この茶髪ペルシャが？ そういやナシロがちよくちよく殿下とか呼んでたようなそうでないような。

「殿下、異界の天秤には言葉が難しすぎたんじゃありませんかね」

「ああそうか。おい、いいか天秤」

イシユーが謎の身振り手振りをしながら話しかけてきた。

「俺、イシユー王子。エライ。ナシロ、家来、エラクナイ。俺の国、南。あっち。俺、お前連れてかえ」

「いや言語は分かるのでいいです」

なんだあのジェスチャー。エライのところで右手を上げて一回転する必要がどこにあったのだろう。

「なんだ、言葉は通じているんじゃないか。だったら何がどう理解できないんだ」

イシユーが呆れたように尋ねた。王子かなんか知らないが本当に腹の立つ奴だ！

「正直何もかも全て意味が分かりません。ここは異世界なの？ どうかの国の王子がなんでこんなところにいるの？ それに天秤って何？ 私のことなの？」

「は？ お前まさか自分がなんでここにいても分からないのか？」

「分かるわけないでしょうが！ だいたい、いきなり……」

その時。

ずっとかんかん照りだった陽射しがさっと翳った。

辺りは急に薄暗くなり、暑かったはずの砂漠は肌寒いほどの気温に変わる。

空を見上げると黒く分厚い雲が太陽を覆い隠している。不穏な空気が漂いはじめた。

「な、何、これ……」

あまりの変わりように驚いていると、イシューが舌打ちした。

「運が悪いな……もたもたし過ぎた。行くぞ。すぐに雹が降る」

「ひよ、ひようー!？」

さっきまで長袖じゃいられないほど暑かった砂漠にどうしてそんなものが。

しかしこの気温の下がりようからすると、あながち嘘でもなさそうだ。イシューは有無を言わさない勢いで私を引きずり起こした。

「砂漠の雹は小石ほどだ。当たれば怪我じゃ済まないぞ。とにかく走れ」

「でも私、荷物が」

体操服やら筆箱が散らばっている辺りを見やると、既にナシロが鞆のジッパ―を閉めるところだった。

「僭越ながら全てこちらに詰めさせていただきました。行きましよう」

「そついうことだ、走れ！」

イシューが私の腕を掴んで走り出す。わけが分からないまま、私はイシューに従った。

しばらく走ると砂漠の中にこんもりと木が茂っている場所が見えた。

いわゆるオアシスというものらしい。

そこでようやく、走る速度が弱まった。二、三分とはいえ砂の上で全力疾走するのは十分に辛い。

普段あまり運動をしない私はもう限界で、半分イシューに引きずられているような状態だった。

「がっ、んばれっ！あそこまで行けば、安心だからっ」

引っ張っているほうもきついのだろう、イシューが息も絶え絶えに言う。ナシロは口を利く余裕もなさそうだ。

今日は鞆に辞書とか便覧とか沢山入れてたからな……。

ああ、それにしても何で私は初対面のペルシャ絨毯男たちと砂漠を全力疾走する羽目になったんだろう。

何か悪いことしたっけ！？

半泣きの私の隣でドフツ、という鈍い音がした。

踏み出した足から十センチほど右のところに、小さいけれど深い穴が開いている。

なんだ？

後ろのほうからも、続けてドフツ、ドフツという音。

固まる私にイシューが叫んだ。

「くっそ！降り出してきやがった！！」

ってことはこれが雹！？

な、なんちゅうとんでもないものが降ってくるんだ！

あの大きさ、威力、当たったら確かに冗談じゃ済まない。

肺も足も痛くてしょうがなかったが、走らなければ。

とにかく必死で足を前に出す。出す。

一步一步が砂に埋まってなかなか進まないけれど、気付けばオアシスはもう目の前だった。

ヤシの木のような幹の太い木が並んで茂っている。

あと少し。

あと少し！

ぜえぜえ言いながら木の下へ滑り込む。イシューに手を引かれて、幹にびったりと沿うように背を預ける。

ナシロも間に合ったらしい。

そのままずるずる、と座り込んだ途端、激しい音と共に砂漠が白い何かで覆われた。

ドドドドツッ！

まるで爆発音のようだ。想像の範疇を超えた光景に私は目を見開く。

砂漠全体を真っ白く覆うそれは、雹だった。

あまりにも沢山、あまりにも勢いよく降る、子どもの拳ほどもある大きな雹の嵐。

呆然とする私に、はあはあと息を乱しながらナシロが言った。

「大地を分かつ、砂漠の、天秤に、光あれ。間に合ったのは、きっと、あなたのおかげですね」

「何が、光あれ、だ。いっしょに、死にかけて、おいて」

同じくぜえぜえ言いながらイシューが仰向けに寝転んだ。

首をこちらに傾けて上目遣いに私を見る。

「おい、お前、さっきの、質問に、答えてやる」

「い、いいよ、落ち着いて、からで」

「いいから、聞け。そろそろ、大丈夫だから」

イシューは目を閉じて大きく深呼吸した。

「よし。まず、ここは恐らく、お前が元いた、場所からすると、異世界だ。俺はさっき言ったとおり、ナデイルの王子。天秤というのはお前を指して、呼んだ。砂漠の天秤、お前を見つけるため、

俺はここまで来たんだ」

……やっぱり意味が分からない。今までで一番丁寧に説明してくれているのは分かるのだけど。

天秤、って、一体なんのことだ？

そういえばさっき掘り当てたやじろべえのこと、イシューが天秤って呼んでなかったっけ。

この細工物、なんとなく握ったまま持ってきてしまった。

片手から少しはみ出す程度の“天秤”を見つめていると、ナシロが労わるように言った。

「理解できずとも仕方ありません、こちらにいらしたばかりでまだ混乱していらつしやるのでしょう。その上このように急に走らされたのでは。電が止んだら急いでルーパーの街まで戻りましょう。そこでまずはゆっくりと休んでください」

ありがとう、それにしてもナシロの回復早いな！イシューはまだ少し苦しそうにしている。

目の前の砂漠では、止む気配もなく電がドカドカ降っている。

やっぱりここは完全な異世界なのだ。

だってこんなとんでもない電も、それに耐えられるような木も私の世界には絶対、存在しなかったはずだ。

一体どうすりゃいいんだ。とにかくこの状況では大人しく彼らについていくしかなさそうだ。くそう。

果たしてこの電が本当に止むのか疑問だったが、現地人が止むと言っている以上そのうち止むのだろう。

体がクタクタだ。ルーパー（ついに異世界の地名まで覚えてしまった）とやらに行くまでどれくらいかかるかは知らないが、今は全力で休むことにしよう。私もイシューの真似をしてずると仰向けに横たわる。

ごろん、と右に寝返りを打つとこちらを見ているイシューと視線

が合った。

ん？ 何も考えずに寝転んだけど、随分距離が近い。

しかも何だか奴の視線が熱っぽいような、そうでないような……？

思わず身じろぎをした私の頬にイシユーが右手を伸ばしてきた。

なんだこれ。

離れたいののに、体が疲れきっていて思うように動かない。息も乱れて声が出ない。

上体を寄せてきたイシユーの、吐息がかかるほど顔が近い。

なんだこれ、ほんとなんだこれ！

頭がぐるんぐるんする。

これってもしかして乙女の危機ってやつじゃないんですかね！？

そうですよー！？ なんでばけつと見てるんだナシロオオオオ！！

長い指がほつぺたに触れる。

ああもうだめだ、ほんともうだめだこれ。

目の前がぐにゃぐにゃと歪む。

イシユーの茶色い髪と金色の目が幾つにも増殖して見える。

すつと通った鼻筋、長いまつげ、形のいい唇。おおイシユー、あ

なたはよく見るとイケメンだったのですね でもやめてくれ。

そして囁くようにイシユーは言った。

「ずっとお前を待ってた。砂漠の天秤。 俺の」

俺の、に続く一言が聞こえた瞬間。

混乱がピークに達した私は、気絶するように眠ってしまったのだ。
った。

4・ワンワン

イシューの声は綺麗なアルトで妙に耳に残った。息切れの名残か、少しかすれた甘い声。

お前は俺の。

イシューは言った。

お前は俺の、ワンワンだ。

「誰がワンワンだあああ!」

叫びながら跳ね起きるとゴツンと鈍い音がして、頭のとっぺんが硬いものにぶつかった。い、いたい。いや、石頭だからそんなに痛くないけど。

「う、お、お目覚めですか……」

頭上から苦しそうなナシロの声が降ってきた。え、なんで頭上から。よくよく回りを見てみると、どうやら私はナシロに後ろから抱きかかえられているらしい。

足元がふわふわする。というか足が地面についていない。目の前には謎のケダモノの後頭部。

そこまで認識して、ようやく自分が動物に乗って移動しているこ

とに気が付いた。

「何この状況!？」

「やっと起きたか、天秤」

からかうような口調で言いながらイシユーが隣に並んだ。ヤツも同じケダモノに騎乗している。初めて見る動物だ。ラクダのようなアルパカのような横顔が一瞬見えた。

「電が止んでも中々目を覚まさないから寝ているうちに運ばせてもらった。もうすぐルーパーに着く。しかしすごい音だったぞ、さっきの頭突き」

「く、いえ、この程度、平気です殿下……」

ナシロが呻くとイシユーは意地悪く、けけけと笑った。本当にいけ好かないヤツだ。

なるほど、状況を把握してみるとどうやら私はかなり長いこと気絶していたらしい。

さっきまで殺人的な電が降っていたのが嘘みたいに晴れていて、首だけ動かして見上げた空には雲ひとつない。頂点近くにあったはずの太陽は随分と地平に近づいており、日没が近づいているのが分かった。

私の体は紫色のペルシャ絨毯に包まれていて、その上からナシロに支えてもらっている。かなりの密着度だが、ナシロはお母さんポジションだなーと思っていたからだろうか、不思議と嫌な感じがしなかった。イシユーとは違って。

イシユーとは違って!？

「あああああ! そうだよ! 気絶したのあんたのせいじゃん!」
「うつ、あ、あまり動かないでください」

思わずイシユーの方へ身を乗り出す。ナシロが困っているが知ったことではない。自分の主人がセクハラ行為に手を染めようとしているところを止められないのが悪いのだ。

イシューは面白いものを見るようにニヤニヤして、少し首を傾けながら私を見ていた。

「俺が？ 何か悪いことしたか？」

野郎、しらばっくれるつもりらしい。ちょっと顔がいいからって調子に乗りやがって……。

私は力いっぱいイシューを睨んだ。

そういえば今気付いたが、ヤツは妙に色艶の良い茶髪の襟足だけ、長く伸ばして三つ編みにしているようだ。それが沈みかけの太陽を背にしてきらきら輝いている。ああ、ぶった切ってやりたい。私は息を吸い込んだ。

「初対面の女の子にあんなに近づくななんて失礼だと思わないわけっ？」

「隣に寝転んだのはお前だろ。べつに俺がわざと近づいたわけじゃない」

「嘘付け、そのあと上半身起こして近寄ってきたでしようが！」

ここで初めてイシューは視線を逸らした。小さい声で何かつぶやいている。

「ちっ、おぼえてたか」

「覚えとるわー！」

完全におちよくられている。ふ、ふざけやがって……怒りのあまり体が震えてきたわ。

殴りたい衝動を必死に抑えていると、ナシロがぽんぽん、と背中を優しく叩いた。

「すみません、不愉快な思いをさせてしまつて。出会ったばかりの相手にあんなに近寄られたら誰だって嫌ですよ。ただ、走りつかれてぼんやりしていただけで、殿下に悪気はなかったんだと思います。ほら、イシューさまもちゃんと謝つて」

ナイス助け舟。ナイスお母さん。

家来に優しく、しかし厳しく促されて、イシューはとうとう観念したらしい。決まり悪そうに後頭部を掻きながら言った。

「あー……と。すまない、調子に乗りすぎた。まさか気絶するほど驚かすと思わなかった。悪かったよ。ただ俺は本当に、子どもの頃からずっと、“天秤”に会えるのを待ちわびていて。それで前が目の前にいるのがつい、嬉しすぎて」

ぽつぽつと並ぶ謝罪の言葉。

が、途中から若干怪しい感じになってきたようなそうでないような……。いやここはスルーしておこう。気付かないほうが幸せなところであるよね。

「もういいよ、反省してるのはわかったから」

「そ、そうか？」

本当はもうちょっと突いてやりたかったが、身の安全のために切り上げることにする。代わりにずっと気になっていた疑問にカタをつけることにした。

「で、ワンワンってなんなの？」

「「は？」」

イシューとナシロの声が重なって聞こえた。

ハトが豆鉄砲を食らった顔、というのはこういうのを指すのだろうか。イシューのさらさらの茶髪の下で、金色の目と口がぽかんと開いてこの上ない間抜け面だ。ナシロの顔は私の頭の上だから見えないが、きっと同じような表情なのだろう。

数秒の後、沈黙を破ったのはイシューだった。

「何って……ワンワンはワンワンだろ」

「ええ、ワンワンとしか言いようが」

いやいや待ってくださいよ。

「ワンワンってあれでしょ？ 赤ちゃんが犬を呼ぶときの……」
「「は？」」

今度も二つ声が揃った。

あ、頭が痛い…… いったいなんだっていうんだ。どうやらこの世界では“ワンワン”という単語が、何か特別な意味を持っているらしい。

「犬の赤ちゃん言葉はバウワウだろ。ワンワンはワンワンだ、お前言葉が通じるのに本当にわからないのか？」

「ちよつと私の世界とは言葉の意味が違うみたいで……。なんかこう、言い換えて説明できないの？」

「言い換え、ですか。しかしワンワンはこう、崇高で抽象的で偉大で創造的な概念のようなものですし」

「それに宗教的な見方をすればワンワンはつまりお前だと解釈することもできる」

意味わかんねえええ！！ どんだけ深い意味を秘めてんだよワンワン！！

途方にくれた私にナシロが背中からそつと語りかけてくる。

「例えば、今私たちが乗っているのはパラウマですが、これはなかなか賢い生き物です。水をあまり必要としないし、食べ物がなくとも一ヶ月ほど元気に動きまわることができます。砂漠の側に住むには欠かせない生き物ですね。ところでこいつの頬ひげを軽く引っ張ってみてください」

何が始まるのかわからないが、ワンワンの意味を理解する手助けになるなら、とケダモノの頬へ手を伸ばす。一際長くて硬い毛を掴み、ゆっくりと引っ張った。

パラウマは「ブヒー」と啼いた。

「これがワンワンです」

「ああそうだな、これもワンワン的一种と言えるな」
私は脱力した。

ますます意味が分からない、ケダモノがブヒーって言っただけじゃないか……なんで二人ですごい感心しあってるんだこいつら。丁寧の説明してくれたつもりなんだろうが、逆にかく乱されたような気がする。

「あのさ……私たぶんこの世界のこと理解できないと思う」
がつくりと頭を垂れると、イシューとナシロは慌てはじめた。

「そ、それは困る！ あのな、ワンワンというのはつまり生き物の根幹であって」

「そうです、誰にも当てはまり誰も純粹にはそのものを見たことがないもので」

「あつ、ほら、例えば目の前に石が飛んできたら目を閉じる、これもワンワンと言って」

「そうですね、食事をとるのもワンワン、睡眠をとるのもワンワン」

「とにかくワンワンは生活の端々に溢れているんだ」

ほ、本格的に頭が痛い。

それから街に着くまでイシューとナシロのワンワン談義は続いた。30分ほどだったが、その間に一生分の「ワンワン」という単語を聞いた気がする。しかもそれだけ説明されたというのに、ワンワンの意味は私にはさっぱり理解できなかったのだった。

5・ルーパーにて

「転びそうになったとき地面に手をつくのは？」

「ワンワンだ」

「じゃあ歌を歌うのは？」

「それはワンワンじゃありませんね」

「うーん、分かった！ ワンワンって反射のことじゃない？ 突かれると痛い、みたいな」

「いや、反射はワンワンの一部だけどそのものじゃないぞ」

ああ、やっぱり理解できん。

私たちはワンワンについての問答を続けながら宿屋へ向かっていった。ルーパーは想像していた以上に大規模な街で、夕暮れ時だというのに通りにはまだ沢山の人が行きかっている。砂漠のすぐ側にこんな立派な町があるなんて驚きだ。

ここではほとんどの建物が石を泥で塗り固めて作ってあるらしく、全体的に白っぽい。通りには布でできた簡易テントが立ち並び、野菜や果物、工芸品が売り買いされていた。

街の人々はイシューたちと似たような格好をしていて、肩から垂らした布がとてもカラフルだ。その雑踏に西日が差して、どうにもこうにも、異国情緒というか、綺麗な光景だなあと思った。

ここが異世界だという点についてはもう諦めて受け入れることにした。うん、もういいよどうでも。もはや投げやりな気分なんだ。ワンワンの一件で、説明を求めることさえもう諦めた。

二人の話によると、王宮がある街に帰れば説明の上手い研究者たちがいるので、ひとまずは王都までついてきて欲しいとのこと。気が進まないが、他に当てもないので従うことにした。

ちなみに制服のままでは目立つので、私はさっき借りた紫色の絨

毯をすっぽりと被っている。割と薄着の人が多いこの街では、これでも結構目立つけど。てか、さすがに暑いな……。

街の入り口にあった検問所でパラウマから降りるようにと促されたので、私たちは二頭のケダモノを牽いて歩いていった。仮にも王子様が動物への騎乗を制限されるっておかしくないか？ さてはさっきの身の上話は全て嘘っぱちだったんじゃないか……とか思ったりもしたが、街の様子を見て納得した。この大喧騒の中、いくら王子様でもこんなケダモノに乗ってドカドカ歩いてたらヒンシュク買うわな。

今歩いているのはどうやらこの街のメインストリートらしい。それにしてもすごい人の波だ。あ、あのテントで売ってる赤い実なんだろう？ あっちの青い葉っぱも、見たことのないものばかりだ。

ついつい気をとられていると、急にイシューに腕を強く引かれた。「こら、余所見すんな。はぐれたら困るだろ」

「い、いたい」

急に手を握ってくるとは、油断も隙もないヤツめ！

慌ててイシューの腕を振り払い、ナシロの背中に隠れる。イシューは頬を引きつらせていた。

「お、お前…… 本当失礼なやつだな……」

「失礼なのはそっちでしょうが。さっきからスキンシップ過剰すぎ！」

悪人ではなさそうだが、乙女の危機という観点からしてイシューは十分に危険人物だ。私にそんな魅力があるとは思えないけど、どうやら彼らにとって私は“天秤”とかいう重要人物？らしく、そのせいで妙な幻想を持たれているようなので。

「おい、ナシロから離れろ」

「いやだ！ イシューに腕掴まれるぐらいならナシロの絨毯持つてるほうがよっぽどマシ！」

「はあ！？ お前はいいかもしれんがナシロが可哀相だろ、よく見てみる！」

言われて見上げてみると、ナシロは右手にパラウマ、左手にパラウマという状態で困ったような微笑を浮かべていた。

「いや、私は別にいいんですが……」

「いいや、思ったことはハッキリ言っただろうがいいぞ、ナシロ。この上背中に三頭めのパラウマがしがみついたんじゃ、手に負えないだろ」

「誰がパラウマだ！」

ああむかつく。肩をすくめる仕草も、半笑いの意地悪な声も、もう全てがむかつく！

がしかし、悔しいけどイシューの言うことももったもなので、澁々ながらナシロからは離れることにした。さようなら、青いペルシヤ絨毯。

イシューは勝ち誇った表情でこっちを見ている。な、殴りたい……

……！

俯いて怒りに震えているとナシロがぼんぼん、と私の肩を撫でた。「殿下、もう少し女性の気持ちを汲めるようにならないといけないよ」

そう、そうだよナシロ！ さすがお母さん。もって言ってやって！ しかしその後ナシロは言わなくていいことを言った。

「初めて訪れた異界の地。天秤だつて物珍しさに違いありません。宿には私が荷物を入れておきますから、その間にお二人でゆっくりと市場を見学なさっててください。どのみち服や装飾品も揃えないといけませんし」

わかってねえええええ！！ 全然分かってないよ、お母さん！
「そういうわけで殿下、お任せしましたよ」

言っが早い、ナシロはパラウマを引っ張って雑踏の中へ消えて

いった。ものすごいスピードだ。イリユージョンかなんかか。

あつという間にこいつと二人きりにされてしまった。恐る恐る隣を見上げると、緊張した様子のイシューと視線がかち合う。やつはぎこちなく言った。

「し、仕方ないな……行くか」

ねえ、なんで緊張してるのこのひと！ ああ、頬が赤く見えるのは夕日のせいだけだと思いたい。

歩いている間は食べ物の店ばかり目に付いたが、よく見ると衣服や装飾品を並べたテントも多い。これは食べ物のほうが珍しいものが沢山あったからであって、私の食い意地が張っているからではない、決して。

嫌な予想に反してイシューは普通だった。ちゃんと着いていく限り手を繋がれたりもしなさそうで、少し安心だ。というか逆にちよつとびびられているような。なんでだ。お母さん（ナシロ）がいないと落ち着かないんだろうか。

服を幾つか見ていて気付いたのは、やっぱり王子だけあってイシューたちの服装は他と比べて豪勢だということである。露天に飾られた服の多くは、色鮮やかだけれどもぱつと見ペルシャ絨毯には見えなかった。安そうなものはイシューたちの肩布と違って細かい刺繍が施されていないからだ。ただ、意外なことにジャラジャラ鳴る腕輪やガラス玉の連なったベルトなどは、数や質の差はあれ、皆何かしら身に着けていた。

テントを幾つか覗いた後、ある店の前でイシューは立ち止まった。

「ここはだいぶいい生地使ってるな。王都までけっこうあるし、この店で好きなのを何着か選ぶといい」

促されて覗くと、なるほど、今まで見た露天の中ではかなり上等なお店のようだ。店の下に敷かれた大判の布の上に、所狭しとばかりに服が並んでいる。テントの奥に座っていたおばちゃんが、いらっしやいと愛想よく笑った。

これも店を見ているうちに気付いたことだが、こちらの服装には男女の差が殆どなく、個性の主張は肩布と装飾品で行うらしい。まず一番下に着るのはゆったりしたツナギのようなもの。これは色が決まっていて、生成りの白か黄土色が一般的。肩のところで上手いこと結んでサイズ調整を行うっぽい。男性は下がズボン状、女性はスカート状になったものを着ている人が多い。

だから下に着るものを選ぶのは、あんまり考えなくても良さそうなのだが……。困った。肩に巻くペルシャ絨毯は一体どういう基準で選べばいいのか分からない。

仕方ない、あまり聞きたくないが、ここは現地人の知恵を借りておくべきだろう。

助けを求めるべく視線を送ると、イシューは一瞬怯んだように見えた。

「な、なんだ」

「あのさ、ちよつとよくわかんないから適当に見立ててくれない？」

「あ、ああ、それもそうか」

イシューは一つ頷くとぎくしゃくと服を選びにかかった。いけ好かないヤツだが、ここまでにすれ違った人たちの服装も参考に考察してみたところ、こいつは割とセンスが良いらしい。装飾品やらの店の人から「兄ちゃん洒落てるね」なんて声まで、幾度かけられていたし。リップサービスかもしれないけど。

まあ、私が選ぶよりは無難なものを見立ててくれるよね、と安心

していたところ、店のおばちゃんの生暖かい目線に気付いた。……
なんだろう。

私の前には、女物の服はえらんだことがないから自信はないが、
などと呟きつつ服を探すイシュー。あれっ、何だか違和感を感じる
んですが何だこれ。

服屋を覗く若い男女の二人連れ。

似合う服を見立ててとねだる女。

緊張しながら服を選ぶ男。

あれれ？ この世界の男女交際のやり方は知らないが、もしかして
これって外から見ると……と、そこまで考えたとき店のおばちゃん
が言い放った。

「あつらー、もしかしてあんたたちデート？ まあまあ、最近の若い
人たちはよくやるわ。よし、アタシも一緒に選んであげようか
ね！」

やつぱそうだったあああああ！！

イシューがギクリと体を強張らせる。

「ち、違っ、そんなんじゃない！」

うん、そうだね確かに違っけど妙に甘酸っぱい感じの反応すんな
！ 逆に肯定してるみたいになっちゃうだろ！！！！

焦る私たちを見て更に勘違いを深めたらしいおばちゃんは、うつ
ふっふ、と笑うのだった。

6・わからない男

「だから違うつて言ってるだろ！」

イシユーは顔を真つ赤にして声を荒げていたが、おばちゃんの含み笑いに軽くないなされてしまった。

「恥ずかしがなくていいんだよ、ほら、これとかどうだい」

「恥ずかしがってなんかない！」

「あんたホントに照れ屋だねえ。あんまり強情はつてると彼女に嫌われるよ。さあ、どれがいいかね、これもこれも、彼女美人だからきつと似合うよお」

「かつ、かの……いや、だからだな！」

おばちゃんはやつたりした口調とは裏腹に、目にも止まらぬ速さで赤やら緑やらの布を広げていく。実に商魂たくましい。イシユーも頑張つてはいるがこれでは何時間かかってても誤解は解けないだろう。どうやらおばちゃんには敵わない、というのはどこの世界でも共通のようだ。

あまりいい気はしないが、この場では無理に誤解を解く必要もなさそうなので、私はイシユーの肩をぽんと叩いた。

「もついいよイシユー、ここはとりあえずそういうことにして、さつさと用事を済ませよう」

「は！？ でもお前、嫌なんじゃないのか？」

「そりゃ、別に嬉しくはないけど、この場限りのことだし」

イシユーは妙な顔をした。

「そうか……まあ、お前がいいなら」

「さあさ、どれにするね？」

「あー、と。そうだな……」

おばちゃんの促しに応じて、イシユーは色とりどりの布の前に屈みこんだ。慚然とした表情はそのままだが、頬の赤みはいつの間にか引いている。

うーん、なんだかよく分からないヤツだ。

結局、イシューが選んでくれたのは桃色、深緑、橙色の三枚だった。どれも金やら銀やらの糸で細かな刺繍が施されており、高級そうな一品だ。個人的には深緑色が気に入った。これは唐草模様にも龍にも見える、絶妙なバランスの柄が縫い付けられていてかっこいいのだ。イシューはその下に着るスカートとズボンも二枚ずつ買ってくれた。そっちは思ったとおり、サイズは関係ないらしい。しかし、異世界でも新しい服を買うとわくわくするもんだね。

買うものを決めるとその場で着付けてもらうことにした。初めての衣服だから勝手が全然分からないし、教えてもらおうにもナシロやイシューに着替えを手伝わせるわけにはいかないからだ。

おばちゃんに連れられて試着スペースに行こうとすると、イシューがこっさり言った。

「言い忘れてたが、その異界の衣装、見つからないようにしろよ。ばれたら騒ぎになる。お嬢さん育ちで自分で脱ぎ着できませんってことにして教えてもらえ」

紫絨毯を被らされた時から薄々感づいてはいたが、どうやらこっちの世界にとつても異世界人は珍しいものらしい。いろいろめんどくさい。

おばちゃんの露店は奥に木箱が積んであり、そこで着替えができるようになっていた。紫絨毯の下に着ていた制服はなんとかバレないように片付けて、スカートの方を着せてもらう。ワンピースのように頭から布を被って、右肩のところであまった布を結んで……うん、思ったより簡単に着られるみたいだ。

「大きさはこれで良さそうだね。じゃあ今度は上か。どれがいいかねえ」

おばちゃんは買ったばかりの三枚を見比べていたが、ふと私が手に持っている紫色の絨毯に目を留めると、ほんと手を叩いた。

「あんだ滅茶苦茶な着方してたけど、その紫のもよく見りゃ一級品

じゃないか。夕方から新しいのを卸すのもなんだし、それでやってあげよう」

おばちゃんは紫絨毯を取り上げると、あっという間に私の体に巻きつけ始めた。うーん、これ多分ナシロのだから返さなきゃいけないんだけど……まあいいか。ナシロには悪いけどしばらく借りさせてもらおう。

しばらくごちゃごちゃと結んだり引つ張ったりを繰り返した後、おばちゃんは満足そうに私の全身を眺めた。どうやらこれでできあがりらしい。絨毯を巻く工程はちよつと複雑だったが、多分、次は一人で着られそうだ。

「まー、思ったとおりよく似合うね。あんたはえらく肌が白いから、濃い色が映えるよ」

鏡に映る自分は、今やどこからどう見ても異世界の住人だった。

白い生成りのスカートに紫の布を重ね、余った部分が右肩からだらりと垂れ下がっている。つまりイシューたちとお揃い、というわけだ。しかし慣れないと腕に垂れ下がってる部分邪魔だな。

おばちゃんにお礼を言つて外に出ると、イシューは店の前の木箱に座つて暇そうに通りを眺めていた。

「お待ちせ、イシュー」

後ろから声をかけるとヤツは振り向き、あんどりと口を開けて硬直した。

なんかもう慣れてきたけど、やめるよそついう青春っぽい反応。

「お、お前それ」

何が原因だか知らないがイシューはしばし口をぱくぱくと動かし、急に背を向けて立ち上がった。

「終わったならもう行くぞ！」

「は？　ちょ、ちよつと待ってよ」

「またどうぞ」

こうして私たちは逃げるようにおばちゃんの露店を後にしたのだ

った。

雑踏の中を早足で歩きながら、イシユウの背中を見失わないように目で追う。

ちくしょう、仮にも女の子連れなのになんてヤツだ。

本当にワケが分からない。

急に距離を縮めてきたかと思えば、おばちゃんにからかわれるだけで真っ赤になったり、ムキになったり。

今みたいにマイペースに行動したり。

男友達はある多いほうじゃないけど、イシユウぐらいの年頃の男の子って皆こんな感じなんだろうか。いやいやそんな馬鹿な。

だいたい、と歩きながら私は思う。

だいたい、イシユウの見た目はそれなりに格好いいのだ。それこそ年頃の女の子にわあきやあ騒がれそうなくらいには。すらっと伸びた足、やたらと綺麗な髪の毛、ちょっと生意気そうだけど整った目鼻立ち。それでいて本人の言を信じるならば王子様なわけで、私よりは多分年上。このハイスペックぶりなら女の子と遊び慣れてて良さそうなものなだけど。

でもイシユウと接してみた感じ、その辺りはどうもウブな印象を受ける。でなけりやちよつと店のおばちゃんにからかわれたくらいで、あんなにムキになるはずがない。

もしや深窓のお嬢さん育ちならぬお坊っちゃん育ち？ いや、それにしては下町を歩くのが上手すぎるしな……。

ただ、私はイシユウが王子様かどうかは置いておいて、身分の高い人物なのは間違いないと踏んでいる。すれ違う人々の装いを見れば、ヤツやナシロの身なりが格段に立派なのはすぐ分かったし、私の服もぽんと買ってくれたし。（そういえばもし本当に王子様ならこれって血税ってやつ？）それに初対面の相手に対するこの偉そうな態度、そこそこの地位がなければ身に付かないんじゃないか？

だって普通こういうヤツは生意気だって殴られたりすると思う。
いや私が殴りたいだけけど。

それに輪を掛けて意味が分からないのが私のことだ。

イシューとナシロは初めて会った私のことを天秤と呼んだ。それがどういう意味なのか、なぜ私がそう呼ばれるのかは全く分からないが、彼らにとって天秤は何か特別な意味を持つものらしい。そして私が天秤だから、イシュー王子さんは出会ったばかりの私を相手に甘酸っぱい何かを撒き散らし続けていると。

……あー、ダメだ、どうしても『天秤』から『青春』に繋がる過程が理解できん。言っておくが私は異世界で出会った王子様に突然一目ぼれされるような、そんな素晴らしい容姿なんぞでは決してない。プロポーシオンも顔も十人並みだ。恋愛経験も……女子高生になったことだしこれからする予定だったんだよ！ といいつつ初めての夏は何事もなく終わってしまったんだっけ。むなしくなってきた。

だから男の子にこんなに近づかれたり、分かりやすくソワソワされるのは初めてのことで。余計にわけがわからないのだ。一体ヤツの感情はどういった論理に従って動いているのだろうと。

「おい」

うーん考えてもわかんないなーなどと唸りながら歩いていると、立ち止まったイシューの背中にぶつかった。

「わっ」

「ぼけつとしないでちゃんと前見て歩いとけよ」

呆れたような声。くう、確かにぼーつとしてたけどいちいち本当にむかつくヤツだな！ むっとして見上げると、イシューは何故か緊張したように言った。

「ちよつと休憩してくか、ナシロがいないうちに話ときたいことがある」

7・続・わからない男

露店で飲み物と果物を買ひ、私たちは広場の隅に腰を落ち着けた。さっきのメインストリートともう一つ大きな通りとの交差した場所で、他の場所に比べ食べ物扱う店が多い。中には大きな天幕を張って、食堂のような体裁を整えてある店もちろほら見えた。

「ほら食えよ」

「ああ、うん」

今まで意識しなかったが、いざ目の前に食べ物や飲み物があると自分が飢えていたことを思い出す。イシューが買ってくれた飲み物はライチのような味で、冷たくて美味しかった。パラウマの背中でナシロに水を分けてもらっただけ、それっきりだったから余計に美味い。夢中になってごくごく飲んでるとイシューが笑った。

「そんなに喉渴いてたのか？」

「んぐつ。わ、わるい？」

「いや、気付かなくて悪かったな。もう一杯貰ってきてやるうか」

「それはいいけど……」

何だかいやに親切だ。不審に思ってよく見てみるとイシューは妙に落ち着きなくそわそわしていた。何だろう。ナシロがいないうちに話しておきたいこと、が関係しているのは間違いなさそうだけど、私の無言の訴えが通じたのか、イシューはぽつりと呟いた。

「お前は俺が嫌いか？」

「はあ？」

いきなり何を。

イシューはいたって真剣らしい。思いつめた表情でカップを握り俯いている。

「えーと、ごめん。ちょっとよく分かんないんだけど、どういうこ

と？」

「……さっき、腕を掴んだら振り払われたし、顔、近づけたときは、気まで失ってたし……俺のことが嫌なんじゃないかと、思った」

ぼそぼそと歯切れが悪い上に要領を得ないが、とりあえず分かったのは、こいつが地味に傷ついてたということである。イシユールはふてくされたようにずるずると飲み物をすすった。

「そりゃ、急に近づいたのは悪かった。でもだからって気絶までするか、普通？ 腕を掴むのも、あんなに拒否されると思わなくて」

だから、とイシユールは続けた。

「嫌われたのかなと思った」

気が遠くなりそうだ。イシユールはさっきまでの生意気ぶりが嘘のようにしゅんとしている。

でも待て、なんだこいつ。

たとえ私に心底嫌われたとしたって、所詮初対面の相手だ。そんなに気にすることだろうか？ もっと言えば、嫌われるのが怖いぐらいならもう少し違う接し方があったはずだ。それを好き勝手にしておいて、「俺のこと嫌いになった？」なんて一体どの口が。

だが　だが、しかし。

殴りたいとか髪の毛ちぎりたいとか色々考えた私だが、イシユールのことを嫌いと言われるとそうでもなかった。

だって何だかんだ言って服買ってもらったりしたし、悔しいけど世話にはなってると思うもの。それにあの砂漠にイシユールたちが来てくれてなかったら、今頃は殺人鬼が原因で死亡、なんてことも有り得たのだ。そう考えると感謝してもいいくらいだと思う。

スキンシップ過多なのは嫌だけど。

「嫌いじゃないよ」

熟考の結果伝えた答えに、イシューは傍目にも分かるほど、ぱつと顔を輝かせた。

「ほ、本当か」

「うーん、私のいた所じゃ、あんまり異性にくっついたり触ったりする文化がなかったから、ああいうのは嫌だけど。それさえ無ければ」

「そうか、ありがとう、天秤」

嬉しそうに笑うイシュー。

いけ好かないヤツだけど、根っこの部分は実は結構いいやつなのかもしれない。ところで、と私は続けた。

「あのさ、ずっと気になってたんだけど、その天秤、って呼ぶのどうにかならない？ 私にも一応名前あるんだしさ」

なんかマジメな話になったから軽く話題を変えよう、程度のつもりで言ったのだが、何故かイシューはものすごく驚いた顔でこっちを見た。

「え、お前、名前あるのか？」

いやいや待て待て。

「あるに決まってるでしょうが！」

「えっ？ 天秤じゃなくて？」

「違うよ！ 私はナツキ、澤村ナツキっていうの。ちなみにナツキ、のほうが名前だから」

全く、王子様（多分）の発想は恐ろしい。天秤が何だか知らないが、異世界人だろうが名前くらい普通あるだろ。そんなくらい分かれよ。

イシューは虚をつかれたように呆然としていたが、ああ、と呟いてからなぜか嬉しそうに笑った。

「なんだ、そうか。お前は名前があるのか、そうか、ナツキ。そういうことか」

「へっ？」

急に名前を呼び捨てにされて驚く私にイシユーは言った。

「天秤のことは、上手く説明できないから詳しくは王都で話したな。まあ簡単に話すと言い伝えのようなものなんだ。大地を分かつ砂漠の天秤が異界の地より舞い降りる、と。この国では当たり前知られている神話だし、俺も小さい頃からその話を聞いて育った。天秤が現れるという予言の年が近づいていたから、会える日を楽しみにしてな。どんな姿をしているのだろう、どんな声で話すのだろう、って。憧れみたいなもんだな」

な、なんかえらくスケールのでかい話になってやしませんか。

神話？ 予言？ やめてよそんなご大層な。

「だから、ナツキに会えて嬉しかった。伝説の天秤が、憧れの相手にようやく、って。でも俺が想像していた天秤の姿は、勝手な想像でしかなかったんだ。俺は天秤が自分の役割も知らない娘だなんて考えたこともなかった。天秤にも名前や、育ってきた世界があるなんてそんなこと、思いもしなかった」

でも違ったんだな　とイシユーの呟く声。

「悪いな、天秤に会えたことに感動しすぎて、ちょっと動揺してた。なんか、やたら触ったり近づいたり。本当に天秤が目の前にいるって、確かめたくてさ。そんで、お前に嫌われたかと思って。勘違いされると嫌になって、おばちゃん相手にすげムキになってさ。そもそも同じ年くらいの女と話す機会がなかったから、恥ずかしいってのもあったし。ヘンなことしちゃったな。でもまあ、これからは気をつけるから」

うーん、分かったような、分からないような。

結局イシューの中でわだかまっていた事柄が私の名前によって何故だか解決されたらしいが、殆どが自己完結みたいなもんだったから、聞いてもよくわからないな。でもまあ、とにかくこいつが本当に根はいいやつっぱいことは分かった。あと、今後は普通に接するよう気をつけてくれるってことも。

他の事はきつとこれから関わっていくうちに分かる、だろう。多分。

「そつえばさ、“天秤”について詳しく聞くのは王都とやらまで我慢するとして。イシュー自身は、天秤に会ってどうしたかったの？」

イシューはすっかり緊張が解けたようで、軽く伸びをしながら私を見て笑う。

「んー？ ガキの頃に思いついたことで、ほんとガキみてーな話だけどさ」

沈みかけの夕日を背に長い三つ編みがきらきらと輝く。

いたずらっぽい笑顔で楽しそうに。

「俺はそいつと友達になりたいと思ってたんだ、ナツキ」

その時初めて、私はイシューを格好いいと思った。

客観的な観察とかではなく、悔しいことに 心が震える、的な

意味で。

8・青春継続中

一瞬でもイシューなんぞに見とれるなんて、どうかしている。

私はヤツが今までにとったム力つく態度を逐一思い出し、胸のときめき（？）のようなものを追い払うことに成功した。

さっきのはあれだ。美術工芸品を見たら感動する、的な。イシューって顔立ちは綺麗だし。

じゃなければつり橋効果がブラシーボだかビックリ箱だか、とにかく気の迷いみたいなものに違いない！

だってイシューは私と友達になりたい、と言ったのだから。私の返事を待たないで、ヤツは歩き出してしまったけれど。

この国の服装というのは、ツナギ、絨毯、それからジャラジャラした装飾品の全てが揃っているのが当たり前なのだそうだ。というわけで、休憩を終えた私たちは装飾品を扱う露店を覗いていた。

金や銀のキラキラした腕輪、大振りの石が嵌ったリング、細かい意匠が施された木製のイヤリングなど、種類や材質さまざまなのが並んでいる。何とも言えず綺麗なものばかりでワクワクしてきた。飾り物ってテンションあがるよね！

イシューは店先にしゃがみ込んで、私のためにあれこれと物色してくれている。

さっきの短い問答でヤツの緊張はすっかり解けたようだ。こちらとしては非常に有難い。いつまでもぎくしゃくした空気なんて耐えられないもの。

ていうか『スキんシップしまくる』と『緊張して甘酸っぱい空気』の二点が解決されたら、イシューってけっこう良いヤツだ。見ず知らずの私を一応助けてくれたし、服とか買ってくれるし。

まあそれを帳消しにするくらいイヤミでむかつくけどな！……しかし、ちゃんと話せば案外いい友人になれるかもしれない。

なんかイシューに対してすごく樂觀的というか、友好的になってる気がするけど、まさか服やら装飾品やらでつられてるわけじゃあるまいな、自分……。それどころかまさかカッコイイとか思っちゃったから……いや、それはない。もしそうなら、いつそ死にたい。男の趣味悪すぎるだろ。

イシューはめばしい品を物色し終え、店の人と値段の交渉をしている。

うーん、それにしても。

「さっきから気になってたんだけど、イシューって王子さまのくせに買い物とか慣れてるよね」

交渉は上手いこと成立したらしい。銀の腕輪、ガラス細工のベルトと交換に代金を払うイシューに声をかけると、ヤツはニヤリと笑った。

「おー、慣れてるぞ。俺は不良だからな。よく抜け出して街で遊んでたんだ」

「あ、やっぱそういう感じなわけね……」

「社会勉強ってヤツだよ」

店から離れ歩きながら楽しそうにうそぶく。お城なんて見たこともないが、こりやお城の人たちは散々苦勞させられたことだろう。

ナシロも含め。

まだ見ぬお城の人たちに同情していると、イシューの腕が目の前に突きつけられた。買ったばかりの腕輪とベルトだ。

「ちょっと寂しいがとりあえずこれだけ着けとけ」

「あ、ありがと」

さすが、というべきか、イシューの見立てた品はあっさりと上品且つ存在感のあるもので、今着ている紫絨毯だけでなく、買った服全てに似合いそうだ。

しかし、この世界に馴染むためとはいえ、こんなチャラチャラしたものを王子様（血税）に買ってもらって、本当にいいんだろうか……。うーむ。でも、値段交渉もしてたし、さすがに露店で売ってるだけあって、さほど高級なものではなさそうだ。お世話になってもいいかな……。

少し悩みながら受け取ると、イシューは

「あとこれも」

と付け足し、首から下げていた金色のネックレスをはずして寄越した。受け取ってみてぎよっとする。

ネックレスは露店で買った腕輪やベルトとは比べ物にならないほど高価そうで、ずっしりと重い。いかにも本物の金ですよというオーラを纏っている。

さすがにこれはちよっと……。

私は慌ててネックレスをイシューに突き返した。

「これってだいぶ高いんでしょ？ 持つてるの怖いからいいよ、それにイシューのだし」

「え？ いや、別に……今更かまわんだろ」

「構うよ！ てか今更って何が今更なんだよ！」

いくら下町に慣れてても、やっぱり王子様（贅沢三昧）の金銭感覚は狂ってんな！

イシューは困ったように私の胸元を指した。

「だってそれ、俺のだし」

え？

それ？ 何が？

恐る恐る下を見るとオバチャンから「上等だねえ〜！」と評された紫絨毯が目に入る。そして私は気付いた。

「えっ、これナシロのじゃなかったの!？」

「俺のだよ！ お前がその……砂漠で、氣イ失ったから、風邪でもひくと悪いと思ってさ」

そ、そうか……。まさかこいつがそこまで親切な振る舞いをするとは思わなかったので、ナシロの絨毯だとばかり。

「ごめん、勝手に着ちゃって。すぐ返そうか？」

「いい」

イシューはなぜかもじもじと落ち着きのない様子で視線をさ迷わせている。

しかし、返さなくていいってコレ血税で買った高級品ですよね！
？ 汚しても弁償とかできませんよ私。 ていうかさつき既にライチ風ジューズちよびつと零しちゃったんだからな！ あとでナシロに謝ろうと思ってたんだからな！

やばいやばい、と焦りつつシミの確認をしていると、

「俺のだけど、やる」

ぶすくれた様子でイシューが言った。

え？ やる？ この高級品を？ なんてまたそんな大盤振る舞いな。

びつくりして顔を上げると頬を赤らめたイシューと視線が合った。
ええと、これも夕日のせい……なわけがない、辺りはそろそろ薄暗くなってきた。えっ、なんで？

「その。よく、似合ってる、と、思う」

叩きつけるようなぶっきらぼうな声。イシューはそれきり顔を背けてしまった。耳が、妙に赤い。

えーと。

ええーと。

イシューは素直じゃないなあとか、ああだからさっきのおばちゃんどこでも態度おかしかったのねーとか色々思うことはあるけど、一つだけ。

どうやら私は大きな勘違いをしていたらしい。

『スキンシップ過剰』の危機は去っても、『甘酸っぱい青春』フラグは折れてなかったのだということを。

……イシューとの友人づきあいには前途多難そうだ。

それから微妙な空気を継続しつつ、身の回り品購入行脚は続いた。日はとづくに沈んでいて、物売りの露店も殆ど撤収してしまっている。

必要なものを買集め、最後にサンダルを購入したところでタイミングよくナシロが現れた。

「イシュー様、天秤、お待たせしました。お買い物はお済みになりましたか？」

ニコニコと微笑むナシロ。会いたかったよお母さん！ しかしこの街広いのによく見つけられたな。

ナシロは私の荷物をごく自然な動きで受け取ってくれた。けっこう重くなってきたところだったので助かる。

何より助かるのはこの青春真っ只中の王子さまと二人きりじゃなくなるってことですけどね！

気まづかったのはイシューも同じだったようで、さっきまでの態度はどこへやら、急に元気になっている。ほんとお母さんに会った子どもみたいだな。

「買い物なら丁度終わったところだ。でも遅いぞナシロ。何してたんだ」

「すみません、ちょっと医者のところに行ってまして」

「え、どこが悪いの？」

思わず尋ねると、ナシロが困ったように笑った。

「いえその……」

「顎か？」

イシユーに指摘され、見てみるとナシロの顎に湿布のようなものが貼られている。アゴ？ え、それってもしかして……。

「ははあ、さっきの石頭が効いたか」

イシユーが意地悪く言った。

さっきの、ってパラウマの上で目を覚まして、ナシロの顎に頭ぶつけたときのこと……だよな。

うわあああ、やつぱり！？

なんかあの時凄い音したもんね、そりゃ腫れたりするよね！

「ご、ごめんナシロ」

「いいんです、たいした怪我じゃありませんから」

「そーかあ？ 丈夫なのが取り柄のおまえが医者にかかるなんて、よっぽど痛かったとしたか思えないけどな」

「ひいひい！ ほんとごめんなさい！」

「大丈夫です、私が大げさにしすぎてしまっただけで、医者にもすぐ治ると言われましたし。お気になさらないでください」

「ナシロ……」

ほんとごめんナシロ。痛かっただろうにむしろ私を気遣ってくれるあなたは本物のお母さんより温かい存在だよ……。

「いやー石頭は怖いなー」

イシユー

それに引き換えあなたの息子は最低だよ、どんな教育したんだよホント。本気で落ち込む私をよそに、ケケケと笑うイシユー。

むかつく。まあ緊張状態じゃなくなっただのはよかったけどさ！

三つ編みは引きちぎっておくべき気がする。

それにしても、仮にも王子様のお付きの人に、怪我なんか負
わせて大丈夫なのか、私？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010y/>

マハラジャな人々

2011年11月29日21時47分発行